

取り組みをスタートさせたキャノンソフトウェアのSOA

# 6種類のサービスメニューを用意 IBM iシステムへのSOA適用は3段階で推進

## システム連携で豊富な経験 多様なツールを揃える

キャノンソフトウェア（以下、キャノンソフト）は、今年2月に「SOA実装サービス」の開始と「SOA実証センター」の開設（3月）を発表したが、これまでIBM i分野で多様な取り組みを行ってきた同社は、IBM iユーザー向けのSOA事業も積極的に推進する方針である。

同社がIBM i向けSOA事業に乗り出す背景には、3つの要素がある。1つは、EAIツール「webMethods」を使ったシステム統合の経験と実績、2つ目は、SOAに活用できる多様なツールを揃えていること、3つ目は、キャノングループ自体が古くからのIBMミッドレンジユーザーで、その構築・運用・保守を含めて、数多くのIBM iベースのSI経験を持っている、ということである。

1つ目のwebMethodsについては、これを扱い始める前段階として、同社が1990年代から各社の主要プラットフォームに対応するツールやソフトウェアを開発し、マルチベンダー環境のソリューションに関して豊富な知識と技術力を蓄えていたことが挙げられる。そこへ、異機種間のシステム統合が市場の重要なテーマとなり、同社が事業化にあたって外部連携やデータ連携を実現するインターフェース基盤として採用したのがwebMethodsだった。その後同社は、webMethodsをコアにしたシステム統合を50社以上手がけている。

2つ目のツールは、要件定義からWebアプリケーションを自動生成する開発ツール「Web Performer」や、ワークフローシステム構築ツール「Web Plant」からエンジン部分を切り出した「ワークフロー コア エンジン」、子会社キャノンソフト情報システムのTCP/IP対応端末エミュレータ「TCPLink Enterprise Server」（以下、TCP Link）などである。いずれも多数の導入実績があり、評価を得ているツールだ。Web Performerは約100社、Web Plantはキャノンの工場をはじめとして多数の生産

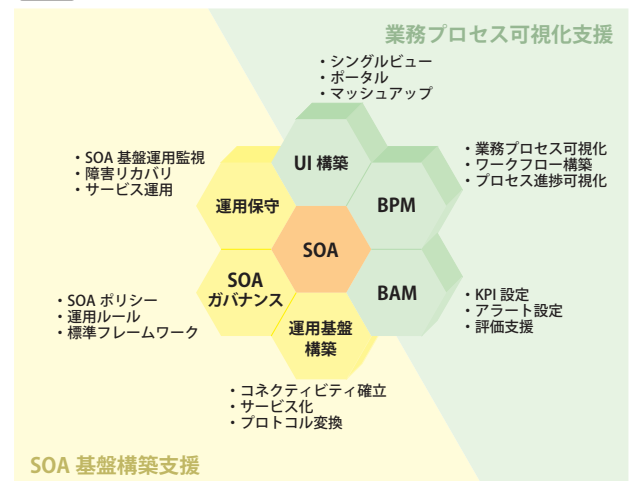
現場で採用されている。また、TCPLinkは、キャノンソフト情報システムの前身の蝶理情報システムから数えて約20年の歴史があり、ホスト連携エミュレータの中では最も普及している製品の1つである。

3つ目については、2つ目で触れたようにキャノン自体がAS/400以来のヘビーユーザーで、その経験を生かして1990年代にAS/400事業をスタートさせ、2003年からは事業ドメインの1つとして取り組んできた経緯がある。

## 2つの切り口と 6つのサービスメニューを用意

キャノンソフトのSOAの特徴は、これら数多くのプロジェクト経験を基に、SOAの始め方を「業務プロセス可視化」と「SOA基盤構築」の2つに大別し、6つのソリューションメニューを用意している点である（図表1）。加えて、前述のツールとシステム連携SIで培ったノウハウを活用して、短期導入と段階的導入を行うのも特徴と言える。6つのメニューはどこから始めてもよく、スモールスタートが可能だ。

図表1 6つのSOAソリューション・メニュー



業務プロセス可視化では、「UI構築」「BPM」「BAM」の3つのメニューがある。

「UI構築」は、複数のシステムにある各種サービスを横断的に処理するためのユーザー・インターフェース構築である。SOAではこうしたUIを簡単にすばやく構築でき、柔軟に変更・改修できることがポイントになるが、同社では、Web Performerやマッシュアップ技術の利用で対応する。

「BPM」(ビジネス・プロセス・マネジメント)は、複数のシステムにわたる業務プロセスを可視化し、SOA基盤上で構築・管理するためのサービスである。これにより、ビジネスの効率向上やボトルネックの発見などが期待できる。ツールとしては、IBMのWebSphere Process Serverやワークフロー コア エンジンを利用する。人手にかかる処理(ヒューマン・ワークフロー)を組み合わせることもできる。

「BAM」(ビジネス・アクティビティ・モニタリング)は、業務プロセスの活動状況を監視し、問題点のいち早い把握とスピーディな対応を可能にするためのサービスである。具体的には、業務プロセスに重要業務評価指標(KPI)を設定し、そのKPIをリアルタイムに監視・測定することにより、ボトルネックの発見を支援する。ツールとしては、IBMのWebSphere Business Monitorを利用する。

SOA基盤構築では、「連携基盤構築」「SOAガバナンス」「運用保守」の3つのメニューがある。

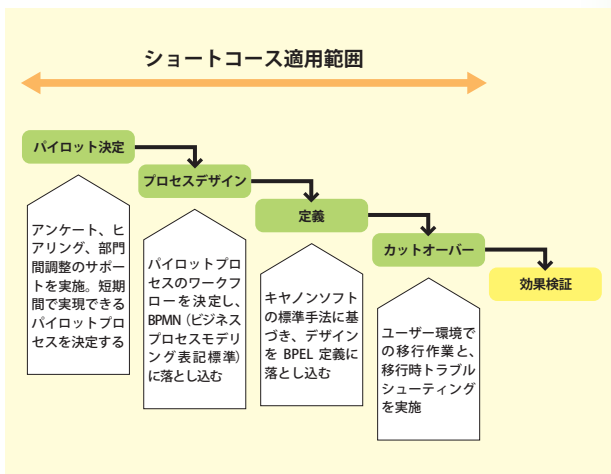
「連携基盤構築」は、複数のシステムに散らばった情報(サービス)を別システムから利用するための基盤構築で、Webサービスの標準技術が用いられる。利用するツールは、IBMのWebSphere Enterprise Service BusやTCPLinkなどである。

「SOAガバナンス」は、SOAの適用で重要になる標準化と統制のためのサービスで、SOAポリシー、ルール、標準フレームワークなどの作成を支援する。

「運用保守」は、SOAベースのシステムが従来型の運用方式と比べて非効率になる部分(各種システムを連携させて業務機能を実現するため)を最適化し、ビジネス・ユーザーの視点に立った運用体制を確立するためのサービスである。

これらのサービスのうち、UI構築、BPM、BAM、連携基盤構築の4つのサービスについては、より短期間で効果が分かる「ショートコース」も用意されている。同社のSI経験で得られた手法を標準化し適用することにより、各作業を短期化するものだ(図表2)。

図表2 SOAソリューションの「ショートコース」(BPMの場合)



### IBM iシステムのSOA化は3段階で推進

IBM iシステムへのSOAの適用については、既存システムを変更することなく、外部に連携プログラムを配置してサービス化する方向である。例えば、IBM iシステムとESBの間にTCPLinkとTCPLink Enterprise Serverアクセスコンポーネントを配置して連携させると、IBM iシステムをまったく変更することなく、ESBにつながるさまざまなシステムとの間で相互に利用が可能になる。IBM iのデータがオープン系システムでも利用でき、オープン系システムのデータがIBM iでも利用できるような環境である。また、そのための画面やワークフローを、Web Performerやワークフロー コア エンジンを使ってスピーディに効率よく構築する考えだ。

キャノンソフトでは、IBM iシステムのSOA化を3つの段階に分けて推進する計画。第1段階は、5250画面のWeb化で、Web Performerを利用して行う。第2段階は、TCPLinkやWebSphere Enterprise Service Busなど使ったIBM iシステムのサービス化で、他サービスとの連携に目標を置く。第3段階は、サービス化されたIBM iシステムを1つのコンポーネントとして扱う、SOA対応の新しい業務アプリケーションの構築である。第3段階が世間一般で言うSOAだが、上記のような段階的なアプローチがキャノンソフトのSOAの特徴である。

同社はSOA事業を、日本IBMとの協業の下に推進する方針。当面、両社合わせて15名体制でスタートし、大手企業を中心に市場を開拓する。2010年度の売上目標は10億円。IBM i市場の活性化の点でも見逃せない動きとなるだろう。